

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 芝田幸一郎

芝田幸一郎氏の論文「ペルー北部中央海岸ネペーニャ谷からみたアンデス形成期社会の競合モデル - 神殿、集う人々、旅する指導者」は、自らの発掘資料を詳細に分析し、発掘された遺跡の位置する地域の社会文化的変化を再構成すると同時に、対象とする地理的領域の範囲を広げて形成期アンデス社会のモデルを提示したものである。論文は、3部全9章から成り、第1部（1～2章）は「論文の目的と位置づけ」、第2部（3～6章）は「発掘データとその分析結果」、第3部（7～9章）は「考察と結論」にあてられている。

第1部は、この論文がめざすものを明らかにすると同時に、これまで影響力をもち標的とすべきモデルを明示する部分である。第1章「序論」では、本論文が対象とする形成期と呼ばれる紀元前一千年期のアンデス社会が、進化主義的な発展段階説の枠組みの中で首長制社会として描かれてきた研究史に、社会像と社会動態の理解に貢献する新たなモデルを呈示することが宣言されている。そして第2章「形成期研究の現状と本研究の意義」において、形成期に関する先行研究を渉猟し、第一章で挙げた「首長制社会」が具体的にどのようなものとして捉えられてきたかを明らかにし、アンデス考古学における形成期に関する中心的な問題である「チャビン・ホライズン論（またはチャビン問題）」を検討する。

第2部は提出者によって実施された発掘調査の結果を呈示する部分である。第3章「発掘」において、使用する編年名称、発掘調査方法と遺構・遺物の登録システムを解説したあと、遺構や主な出土遺物を記述する。第4章「建築」においては、セロ・ブランコ遺跡とワカ・パルティータ遺跡から出土した主な建築物に関するデータとその分析結果が提示される。第5章「土器」では、上記の両遺跡から出土した土器資料の分析結果が提示される。そして最後の第6章「図像」では、アンデス形成期研究史上まれに見る質と量をもって発見された図像資料が分析されている。

第3部は、第2部において行われた様々な分析結果を多角的に考察し、形成期アンデスの社会像に迫ろうとする部分である。第7章「ネペーニャ下流域の編年と地域間関係」において、調査地ネペーニャ下流域の社会をアンデス文明史の中に位置づけるために、編年が明らかにされる。その結果、時代の進展に沿って、セロ・ブランコ期には多様な地域との間で人と物の交流が見られ、ネペーニャ期に入ると神殿が衰退する他地域と異なり、山地との紐帯強化をとおして神殿が繁栄を続けるものの、ネペーニャ期からサマンコ期にかけて神殿は最終的に放棄され、新しいタイプの祭祀センターにとって代わられていること

を明らかにする。第8章「ネペーニャ下流域ローカル社会の諸相」においては、ローカルな社会統合について述べられ、上記の2遺跡には異なるローカル集団が所属していたことが明らかにされている。そして最後の第9章「神殿、集う人々、旅する指導者—形成期社会の多重競合モデル」では、結論として、ネペーニャ下流域の考古資料と合致する形成期社会に関するエスノヒストリー研究を援用した新たなモデルが提案されている。芝田氏のモデルは「地域内では指導者およびその拠点たる神殿と支持者の間には強い互惠関係があり、指導者間には支持者獲得をめぐる強い競合関係が想定されるが、地域間では指導者と他地域の支持者の間には直接の繋がりが少なく、別々の地域の指導者間には饗宴にかかわる人と物の行き来を介した緩やかな互惠関係が想定される」というものである。

このような芝田氏の論文は、審査員全員から高い評価を受けた。その評価は、考古学発掘に基づく実証的な部分と、理論的なモデル提示の部分の双方に及んでいる。実証的な部分に関しては、有名な遺跡でありながら詳細なデータが提示されていなかったセロ・ブランコ遺跡の発掘調査成果の提示と地域の編年確立作業が行われたこと、神殿の多彩色装飾とくに保存状態のきわめて良好なネコ科動物をモチーフとした巨大なレリーフを発見したことなど、アンデス考古学における第一級の成果をあげたものであると、審査員を務めたアンデス考古学の専門家から高い評価を受けた。

一方、考古学を専門としない文化人類学分野の審査員からは、理論的モデル構築の部分に関して高い評価が述べられた。モデル構築作業のスケールが大きく、問題の追究の手続きがスリリングであり、考古学分野以外の研究者にとっても非常に興味深い論文であるというのが、共通した評価である。そして、対象社会における権力についての芝田氏の扱いは社会の時間的変化に関してしばしば用いられてきた「新進化主義」の枠組みを脱した新たなものであるという評価も与えられた。

しかし、審査員からはいくつかの問題点が指摘された。考古学の専門家からは、提示されるべきデータの若干の不足、データ提示法の不備、実証的部分における分析結果の総合の不足によるモデル提示部との乖離が指摘された。また、文化人類学の観点からは、新進化主義の枠組みを使っても説得的な分析ができるのではないかと、ネペーニャ河谷のアンデス文明形成期における特別な位置についての別種のモデルを作る可能性があるのではないかとといった指摘が行われた。

しかし、指摘された問題点は本論文の高い学術的価値を損なうものではないと判断される。したがって、本審査委員会は、芝田幸一郎氏の論文に対し、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。